

アサギマダラの移動が分かるグラフ・2016 年秋

はじめに

鹿児島昆虫同好会の長峰さんや福田さんの呼びかけに応じて、大阪市立自然史博物館の日浦 勇さんが全国の仲間に呼びかけて会を結成され、現在の“アサギマダラの会”へと発展してきたわけであるが、その間の 30 数年にわたるアサギマダラのマーキング調査により、膨大な移動データが蓄積されてきた。その貴重な移動データは適切に統計・解析されてアサギマダラの生態解明に生かされて来たであろうか。残念ながら **NO** と言いたい。

アサギマダラのマーキング調査で分かる移動は、標識地と再捕獲地の点の記録であり、その両者を結ぶ線ではない。また、その地をアサギマダラが通っていても、調査者がいなければ再捕獲される機会はないわけである。さらに加えるならば、再捕獲をしてもメイリングリスト (asagi および asaginet) で報告をしない人や、移動情報を出さない人が増えてきており、統計・解析にも支障を来たす状態となっている。そこで、非常手段ではあるが、移動情報の出されていない再捕獲についても、過去のデータから地域を推定して移動事例として算入して集計し、グラフにしてみたところ、全国のアサギマダラの移動経路が何となく線として見えてきた。

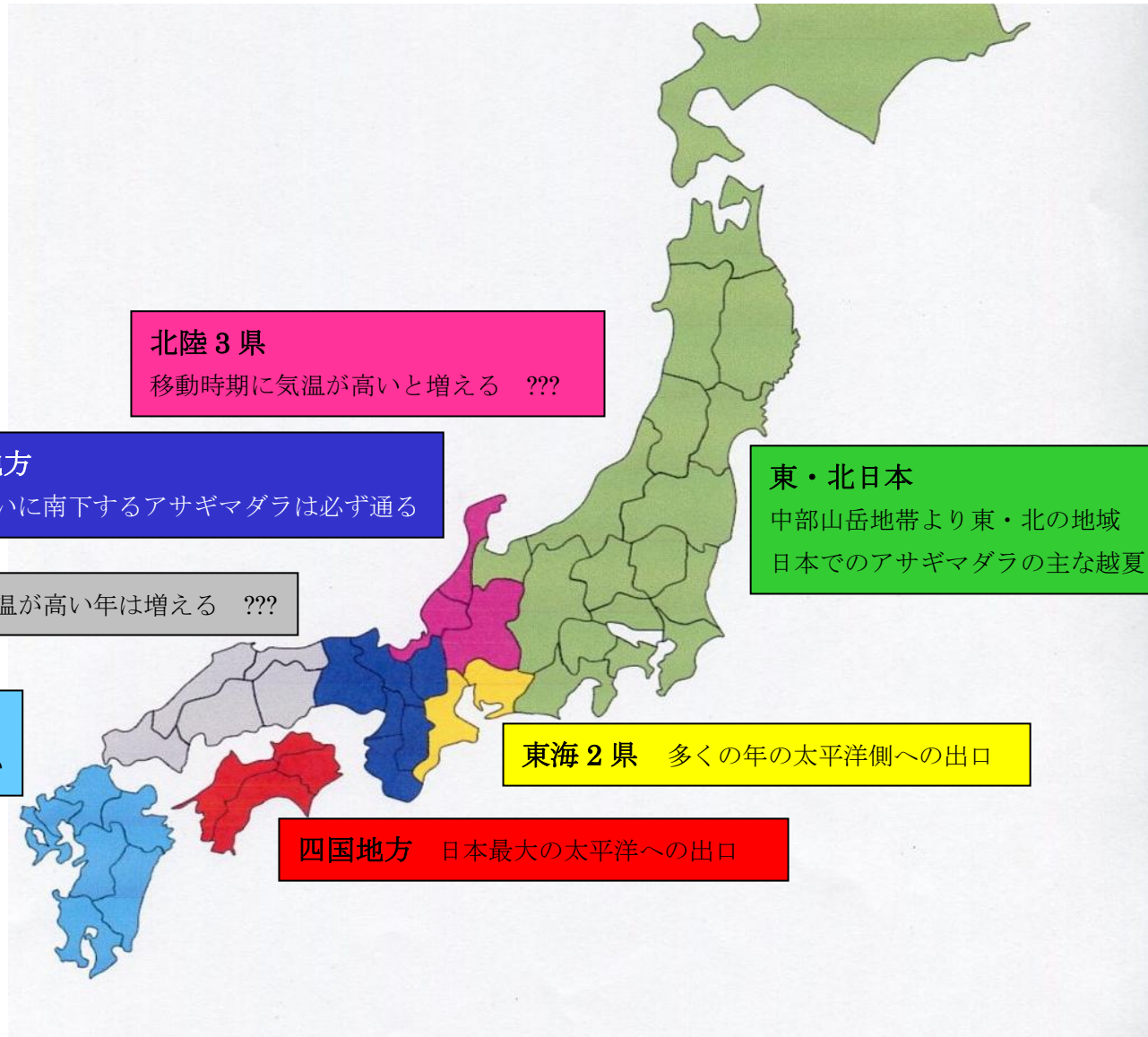
一方、アサギマダラの人気は上昇を続けており、特に南下の時期の秋に焦点を絞ってアサギマダラを呼び寄せるためのフジバカマ園を作り、地方再生や観光客誘致の企画に取り入れる地域が増えているのは微笑ましい。

アサギマダラは、かつては昆虫少年やマニアのあこがれのチョウであった。源氏物語千年紀 (平成 20 年、京都市) を機にフジバカマの栽培が全国的に盛んになり、アサギマダラがフジバカマの花に誘引されて市民の目の前にも現れるようになって、その美しさ、優美さが広く知られるようになった。今ではいろいろな分野の人が様々な形でアサギマダラに関わるようになり、アサギマダラを巡る文化も多様化してきている。だから、狩猟本能やゲーム欲などを満たすためにマーキングを続けている人がいても責める気にはなれないが、マーキング調査に参加して仲間と連携し、アサギマダラを追う事の楽しさ、奥深さを知ってもらいたいと思う。

アサギマダラの日本での主な越夏・繁殖地は中部山岳地帯よりも東および北の地域である。この地域を便宜的に『**東・北日本**』と呼び、秋の 9 月から 10 月にかけての南下の軌跡を、グラフによって追うことにした。さらにそれ以外の地域で標識されたアサギマダラの移動で検証することにより、2016 年秋の南下のルートの特徴が見えてくるだろう。

アサギマダラの秋の南下のルートは毎年違う。2015 年には 27 頭ものアサギマダラが台湾で再捕獲されたが、2016 年はゼロである。アサギマダラの秋の南下を促す要因の一つは日照時間が短くなることであるとされているが、気温の低下のほうが直接的に南下と関係しているのではないだろうか。中でも最高気温の推移とその時期は、移動の方向性と深く関係しているように思われる。

東・北日本 および他の地域の特徴



北陸3県
移動時期に気温が高いと増える ???

近畿地方
陸地伝いに南下するアサギマダラは必ず通る

東・北日本
中部山岳地帯より東・北の地域
日本でのアサギマダラの主な越夏・繁殖地帯

中国地方 移動時期に気温が高い年は増える ???

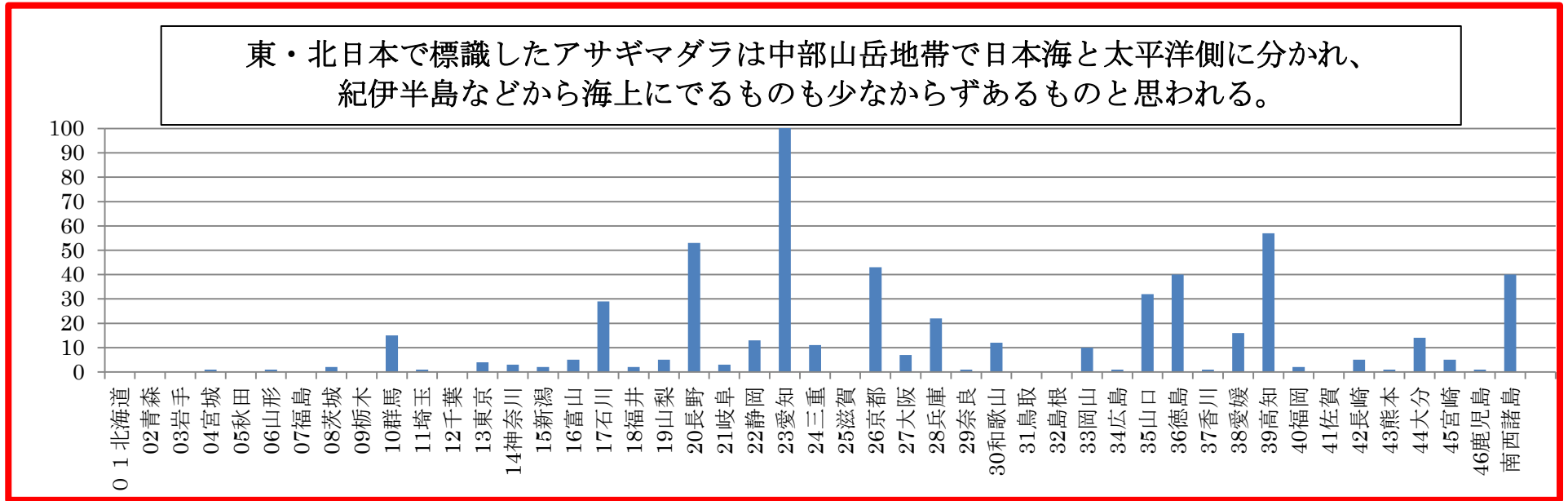
九州地方
中国地方からの南下が多い

東海2県 多くの年の太平洋側への出口

四国地方 日本最大の太平洋への出口

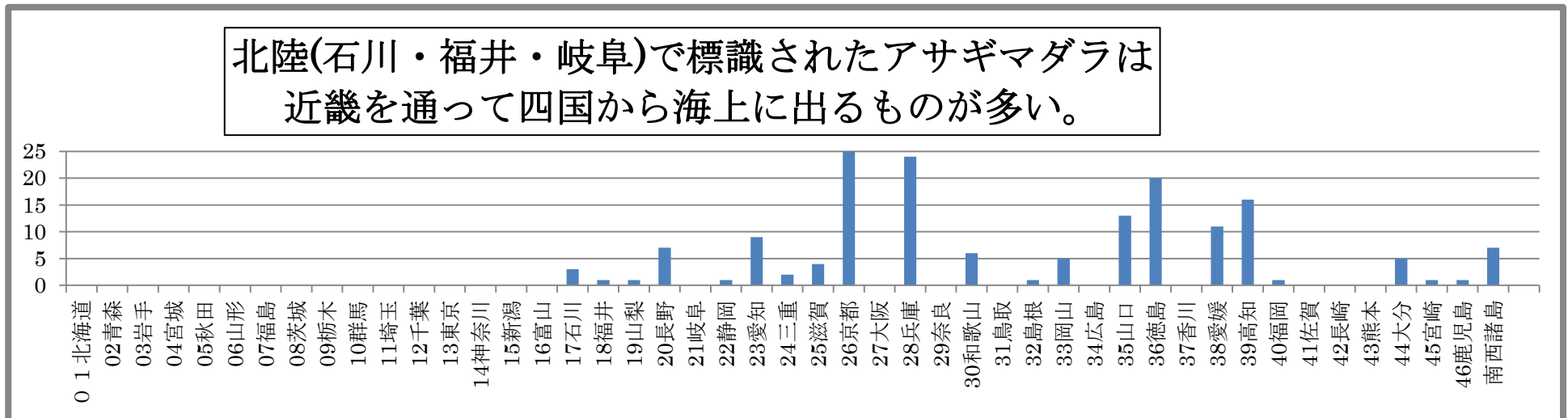
南西諸島
沖縄県を含む九州よりも南の島々

① 東・北日本で標識されたアサギマダラは、どこで何頭再捕獲されたか(561頭)



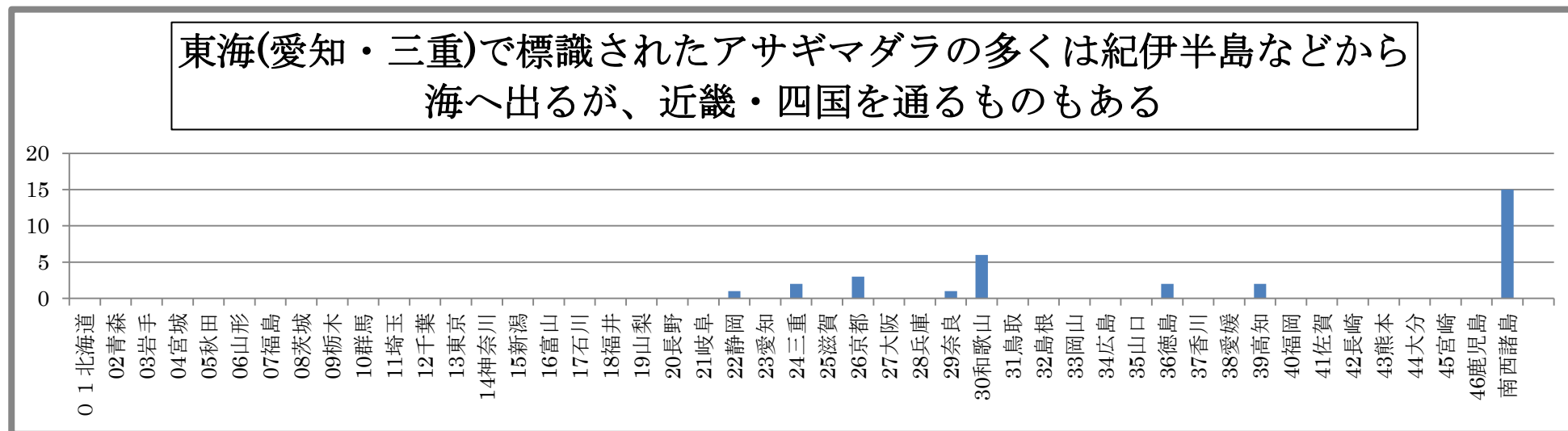
- 2016年は圧倒的に太平洋側に多い。一部は陸伝いに近畿→四国→海上というものもあると思われる。

② 北陸で標識されたアサギマダラはどこで何頭再捕獲されたか(166頭)



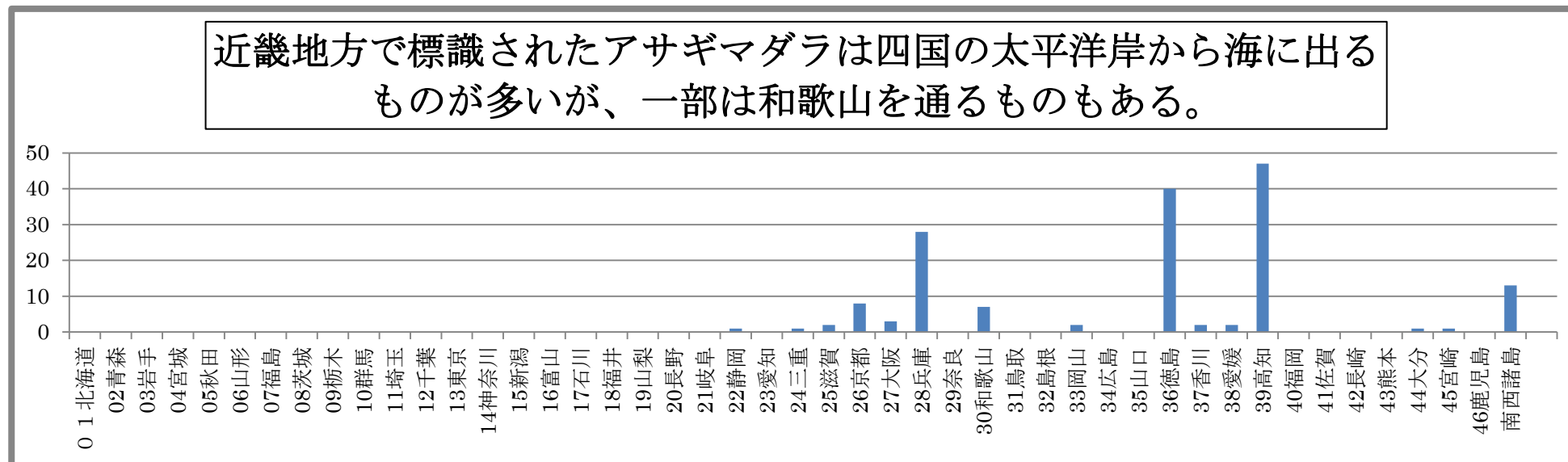
- 多くの年のパターンだが、近畿を通り四国から海上へ出るものが多い。

③東海(太平洋側の出口)で標識されたアサギマダラは、どこで何頭再捕獲されたか(32 頭)



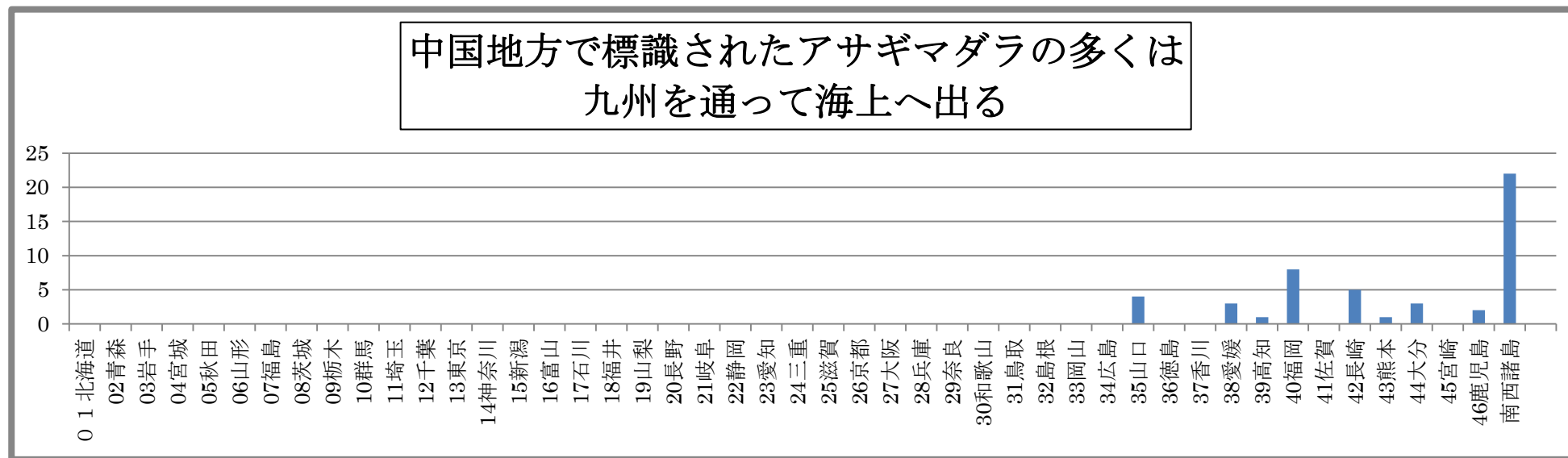
- 2016 年は和歌山で数頭再捕獲されているところから、紀伊半島を海岸伝いに南下し、海上に出るものが多いと思われる。

④近畿地方で標識されたアサギマダラは、どこで何頭再捕獲されたか(158 頭)



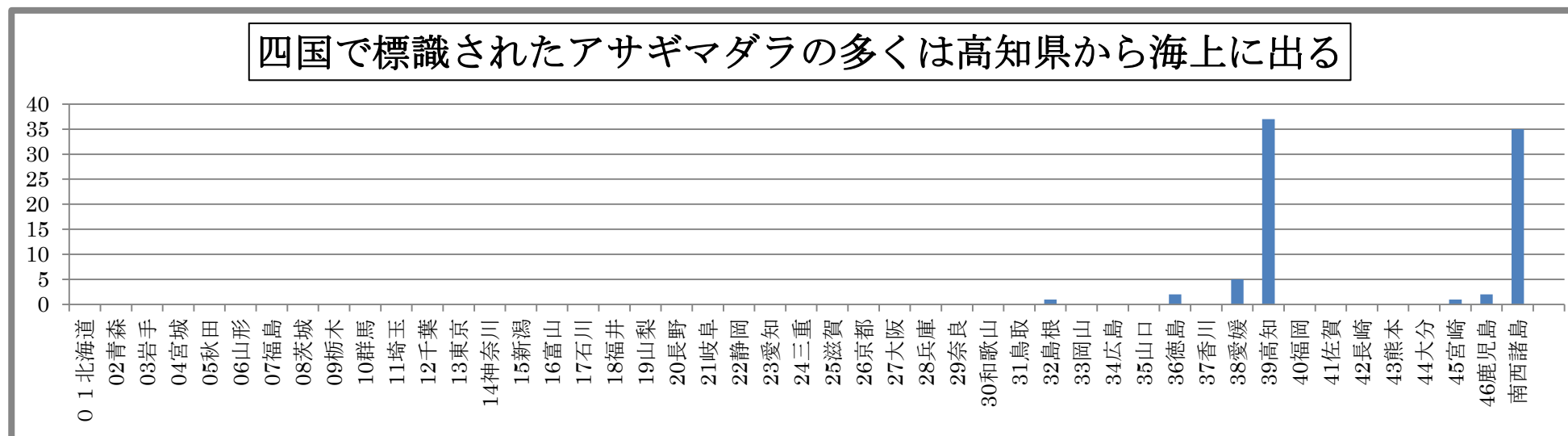
- 2016 年は、一部は紀伊半島から四国あるいは海上に出るものもあるが、多くは四国を通り海上へ出るものと思われる。

⑤中国地方で標識されたアサギマダラはどこで何頭再捕獲されたか(49 頭)



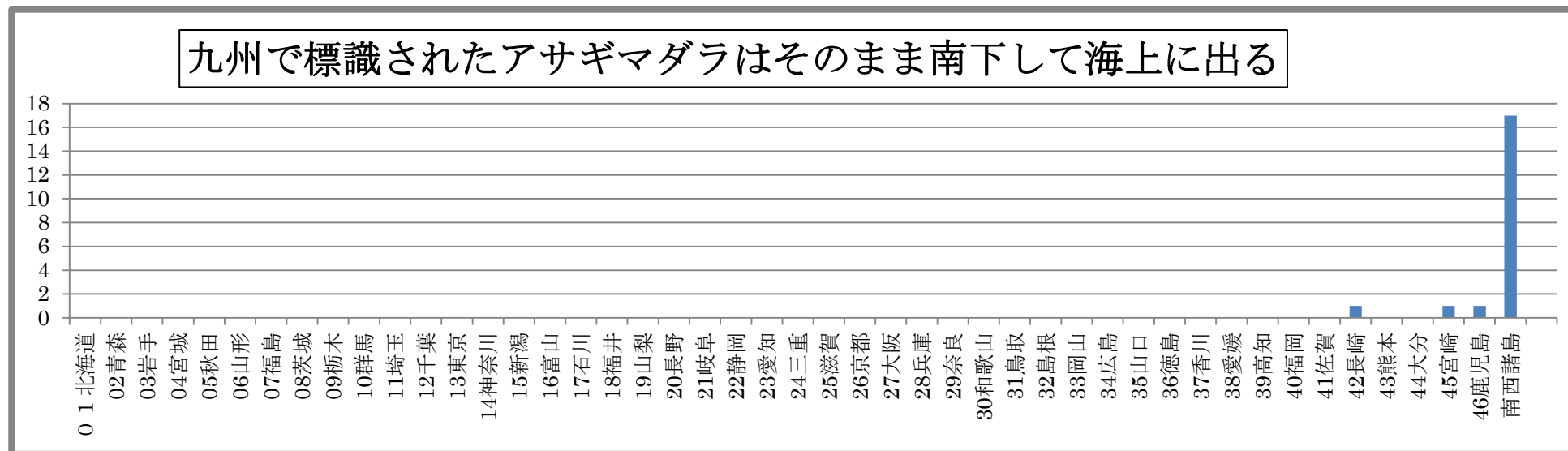
- 2016 年は、多くが九州をって海上へ出たものと思われる。

⑥四国で標識されたアサギマダラはどこで何頭再捕獲されたか(84 頭)



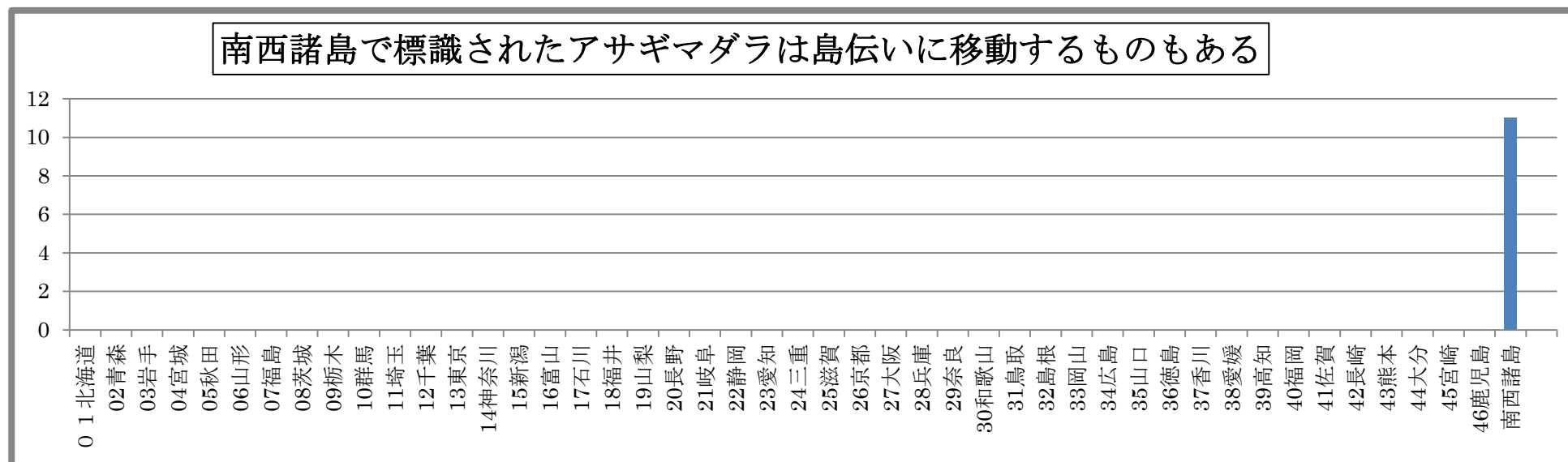
- 2016 年は、四国から九州にわたるものは少なく、そのまま海上に出て南下するらしい。

⑦ 九州で標識されたアサギマダラはどこで何頭再捕獲されたか(20 頭)



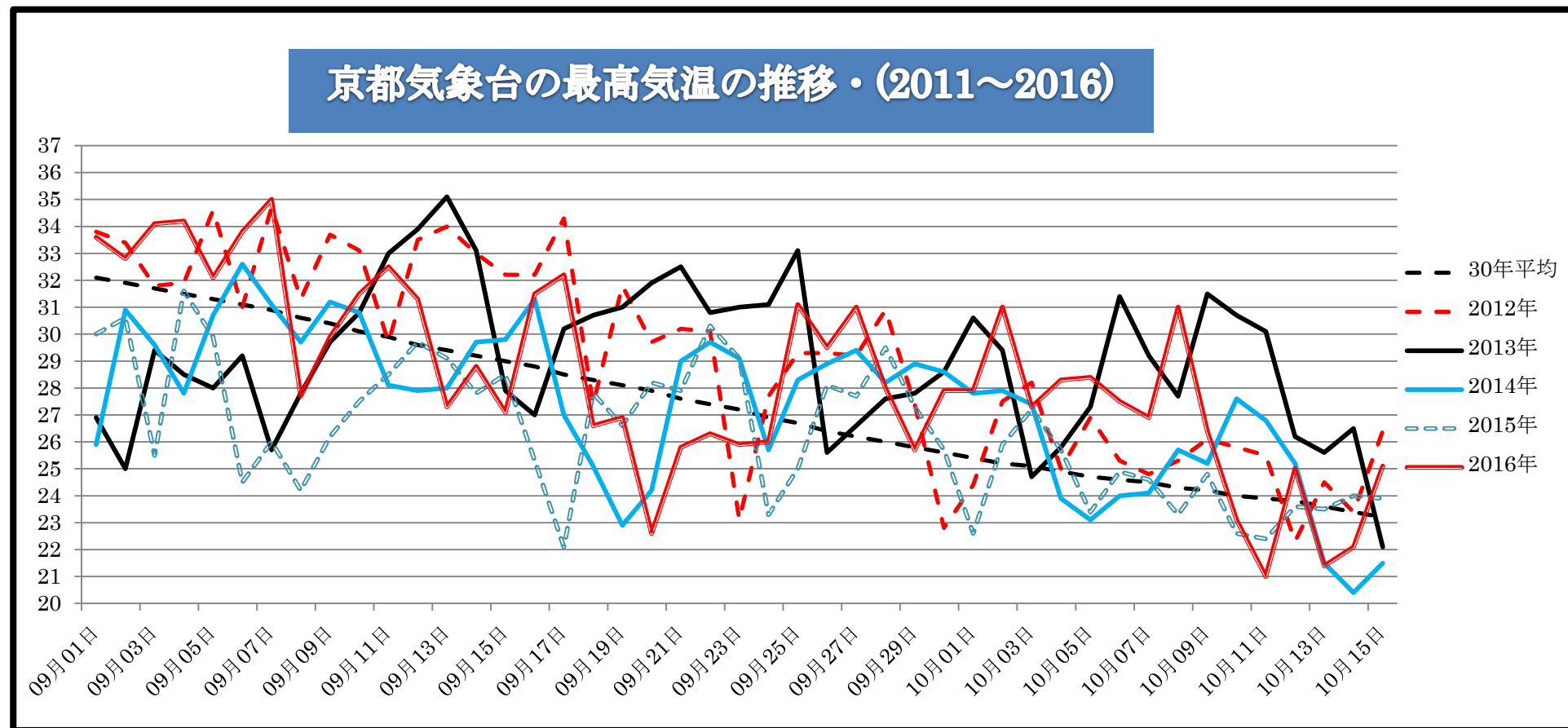
- 2016 年は、そのまま海上に出て南下したらしい。

⑧ 南西諸島で標識されたアサギマダラはどこで何頭再捕獲されたか(11 頭)



- 2016 年は、島々の間での移動が 11 例あった。

⑨ 最高気温の推移 (2012年～2016年)

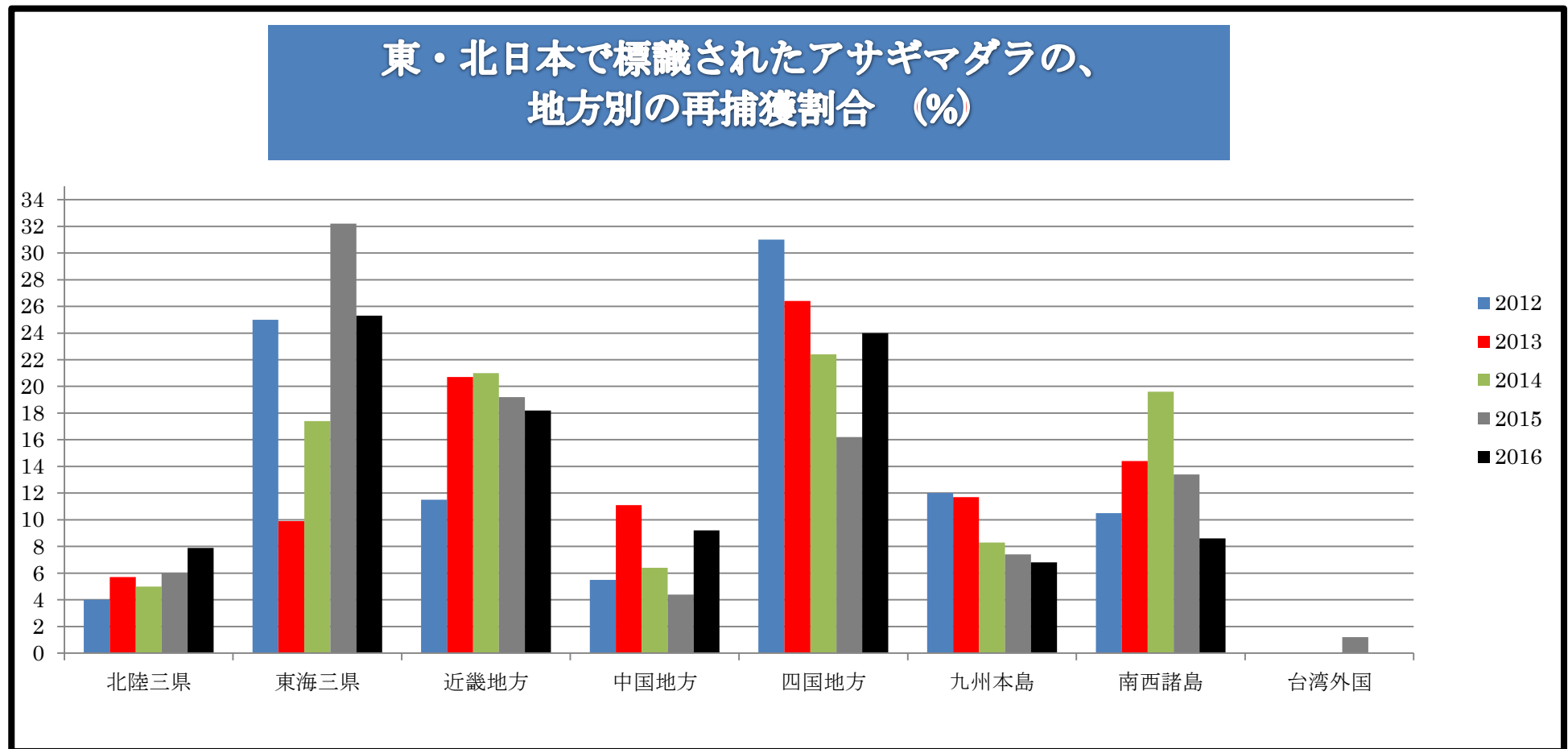


- 2012年から2016年の京都気象台の最高気温の推移である。10月初旬までで見ると、2015年はほぼ平年通りの推移であるが、2016年は4℃から7℃も高い真夏日が続いていた。2016年は10月10日前後に一挙に10℃も最高気温が低下したために、アサギマダラは暖かいより低所に、より南へとの移動を余儀なくされたものと思われる。京都市内の数か所のフジバカマ畑では、山腹にあるフジバカマ畑はアサギマダラが素通りしてしまい、平野部の水辺、つまり低所のフジバカマ畑がアサギマダラで賑わった現象が見られた。

参照 : <http://kyoto.d.dooo.jp/mizuo2016.html>

- 2016年の最高気温は10月半ばには平年に戻ったが、京都で発見された原種フジバカマは、花期が早いので終わってしまい、アサギマダラが戻って来ることはなかった。温暖化傾向から考えると、アサギマダラを呼ぶためのフジバカマとしては、花期の遅い園芸種のフジバカマが良いのかなと思う。

⑩アサギマダラの移動のルートは毎年変わる (2012年～2016年)



- 日本での主な越夏・繁殖地である中部山岳地帯よりも東・北の地域で標識されたアサギマダラが、どの地域でどれぐらいの割合で再捕獲されたかを示したグラフである。
- 中部山岳地帯は、北アルプス・中央アルプス・南アルプスなどの2000m～3000mの高山が日本列島を南北に縦断し、平地で20℃前後の気温となるアサギマダラの南下時期には、越えることが出来ない低温地帯となるため、アサギマダラの多くは天竜川・木曾川などの低地を南下して太平洋側に出るものが多いものと思われる。
- 東海三県の2013年の数値が低いのは、最高気温が10月初旬まで真夏日だったので、アサギマダラはアルプスを越え、南下したものと思われる。